

# 古代への招待状

## 埋もれていた遺産

21

石斧(せきぎ)は旧石器時代、縄文時代、弥生時代に使われた道具です。石斧(いしおの)というと、木を切

れていません。

例えば、旧石器時代の石斧の中にはナウマンソウなどの動物の解体に使われたと考えられているものがあります。また、縄文時代では打製石斧、磨製石斧の2種類があり、打製石斧は土を掘る道具、磨製石斧は木を切ったり削ったりする道具と考えられています。

長野市立博物館の縄文時代のコーナーにひときわ大きな石斧が展示してあります。松代町大室の宮ノ入遺跡で発見されたもので、長野市内では最古の石斧です。故森嶋稔さん

ったり削ったりする道具をイメージする人も多いと思いますが、必ずしもすべてが木を加工する道具とは考えら

(前長野県考古学会会長)がこの石斧の発見の様子を、「遺物は植

林作業の際の小ビットから出たものであると採集者の宮本速雄氏は

### 神子柴型 伝來說も 片面が平ら 断面D字型

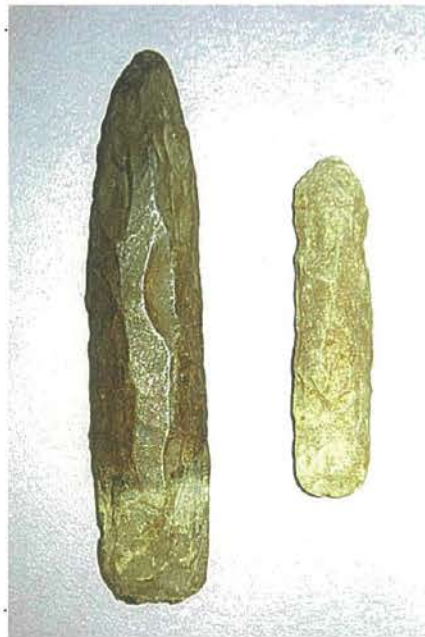
て、5点である。ほかに採集されたものはない」と記しています。これらの石斧は、刃先だけを磨いているので局部磨製石斧と呼んで

考古学では神子柴型石斧と呼んでいます。そして、神子柴型石斧は大陸からもたらされたとする説があるのです。さて、宮ノ入遺跡の

石斧も、当時の人々に残されたのか、を知ることが重要です。残念ながら、すべて謎です。神子柴型石斧は全国

なせまとめて土の中に残されたのか、を知ることが重要です。残念ながら、すべて謎です。神子柴型石斧は全国

いますが、その製作場所が分かった例はほとんどありませんし、どのような柄に付けられていたのかも不明です。小県郡真田町の唐



宮ノ入遺跡の石斧(清水一男さん寄託、市立博物館所蔵)

おり、片面が平らで断面がかまぼこのようにD字形をしています。今から約1万6000年前の、旧石器時代から縄文時代に移り変わる時期だけに見られるもので、

5点のうち1点は長さ約32センチもあり、とても実用とは思えません。外国では大きな石斧は宝物としての意味を備えているという例があります。宮ノ入遺跡の



沢日遺跡や上伊那郡南箕輪村の神子柴遺跡では石斧がまとまって出土しています。また、味があるのでしょうか。宮ノ入遺跡には、神子柴型石斧の謎を解くカギが眠っているかもしれません。

鶴田典昭・県埋蔵文化財センター調査研究員

### 道具・石斧

語っている。採集された遺物は、すべて神子柴型石斧のみであった

- ◇打製石斧 石を打ち欠いて斧の形を作り出した石器。
  - ◇磨製石斧 打製石斧に対し、最後に砥石(といし)で磨いて作られた斧形の石器。
  - ◇神子柴型石斧 上伊那郡南箕輪村の神子柴遺跡より発見された石斧にちなんで名付けられた。
- ※宮ノ入遺跡の石斧は、2月29日まで県立歴史館で開催されている「神子柴遺跡の石器群」に出品されています。

# 古代への招待状

## 埋もれていた遺産

22

上信越道須坂長野東インターチェンジ（IC）に向かうトンネル手前、若穂綿内の高速道路下には、弥生時代

後背湿地に水田、その境に墓や井戸を造り、営まれていたことが発掘調査の結果、明らかになりました。

春山ムラのSB01は

隅丸長方形で、中型の竪穴住居跡です。この住居は焼失住居であったため、当時の様子を臨場感をもって伝えてくれます。住居跡からは、たくさんの炭化材とともに、つぼ・かめ・鉢などの土器が出土し、太形蛤刃石斧（ふとがたはまぐりばせきか）や扁平片刃石斧（へんぺいかたばせきか）など、水稲耕作の本格化とともに普及

中期後半から後期に営まれた集落、春山ムラの一角がありました。春山ムラは千曲川の自然堤防上に竪穴住居、

した大陸系磨製石斧類が出土しました。

太形蛤刃石斧のう

### 道具・金属器の出現

りなく、大切に保管されてきたようでした。一方、SB01からは、

## 弥生中期後半に鉄斧 善光寺平 銅腕輪や剣も



春山B遺跡から検出された弥生時代のSB01住居跡(県立歴史館提供)

長さ5・5センチの方形で、厚さ5・5センチの鉄製の斧(鉄斧Ⅱてつぼ)も出土しました。鉄斧は、扁平片刃石斧と同じ形で、機能も同じです。

善光寺平では、弥生時代中期後半ころから稲作と関係する弥生時代特有の石の道具(大陸系磨製石斧類)が本格的に普及し、併せて、

鉄という新素材の出現に弥生人はどんな思いを持ったことでしょうか。時は今から約2000年ほど前の弥生時代中期後半です。

金属製の道具も導入されます。SB01と同様の鉄斧は、篠ノ井の光林寺裏山遺跡からも発見されています。中期後半は、栗林式という特徴的な土器が作ら

れ、大きな集落が形成されて、水稲耕作が本格化する時期です。こうした変化は、南関東の各地でも同様で、東日本の動向と共通して

器が消滅していきま す。かま、すき先、くわ先、やじり、剣、刀子、ヤリガンナ、釣り針などの農具、武器類など各種の道具に形



春山B遺跡出土の鉄斧(県立歴史館所蔵)



鉄斧の使用例

の集中遺跡として注目されています。金属器には鉄素材のほか、銅素材の製品があります。鉄と同様、中期後半から本格的に出現します。腕輪である銅釧(くしろ)や銅鍔(とく)、銅剣といった武器類などが発見されています。現在、善光寺平一帯は、東日本の中で金属器を多く保有する地域として注目されています。

作られ使用されました。そうした中で、篠ノ井遺跡群からは多くは、清水一男さん所有、市立博物館保管でした。◇訂正 1月31日付の「石斧」の写真資料は、清水一男さん所有、市立博物館保管でした。◇SB01 SBは埋蔵文化財センターで使用している竪穴住居跡の記号、01は発見順に付けられた番号。

市澤英利・長野県埋蔵文化財センター調査部長

# 古代への招待状

## 埋もれていた遺産

23

弥生時代の布は、それまでの籐(すだれ)や菰(こも)に似た織

則正しく上下入れ替え、その隙間に緯糸(よこいと)を入れて作る密度の細かい「織り布」が作られるようになったと考えられています。それに従って布を織る道具も、経糸と緯糸を規則正しく織る操作を能率良く行うことができる「機(はた)」が使われるようになりました。

弥生時代の機織り具は、現在も使われている「地機(じばた)」や「高機(たかはた)」のように、織り具本体が機台の上に載ったものではなく、機の部品

の一方をくいや木の幹

リ方で編まれていた「編み布」に加えて、経糸(たていと)を規

### 道具・原始機

## 布の密度 細かく織る 経糸と緯糸を能率良く

などに結び付けて固定し、もう一方の端を織

る人の腰に掛けて、織り具を保ちながら織る「原始機(げんしばた)」を使用していたと考え

あるため土器や石器などに比べて残りづらく、残念ながら機織り具一組の部品がそろつ

(きとらがわ)遺跡などから機の一部の出土が報告されています。長野市内では、まだ

るための糸を紡ぐ道具である紡錘車の出土が報告されていることから、弥生時代の長野市で

も「原始機」が使われていたと思われず。弥生時代の「原始機」では、どんな布が織られていたのか、どうして土に埋もれていたのか、



春山B遺跡から出土した赤漆付きの布片(県立歴史館所蔵)

られています。原始機は幾つかの部品を組み合わせて作っていますが、木製で

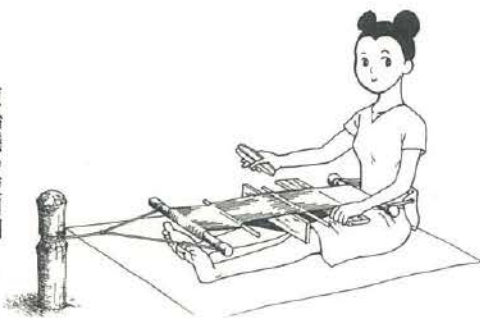
て出土した例はありません。全国的には静岡県の登呂(とろ)遺跡や、大阪府の鬼虎川

弥生時代の機織り具の出土例はありませんが、若穂綿内の榎田遺跡などで、織り布を織

が、発掘されたわずかな布片や、土器に付いている布の圧痕から、繊維の材質や織り方の

研究がされています。弥生時代の遺跡から出土して材質が明らかに

原始機の使用例



も「原始機」が使われていたと思われず。弥生時代の「原始機」では、どんな布が織られていたのか、どうして土に埋もれていたのか、

西香子・県埋蔵文化財センター調査  
研究員

# 古代への招待状

## 埋もれていた遺産

24

「弥生時代の始まりは稲作の始まり」と、よくいわれます。大陸由来の稲作は、その技術だけでなく稲作に伴う農耕用木製品や石

器・金属器なども同時にもたらしました。これら伝来した道具や機具は西日本各地の弥生時代前期の遺跡で確認され、次第に東日本

に浸透してゆく過程が遺跡の調査から明らかになってきています。

長野県の発掘調査でも北信地区で稲作の痕跡である水田跡が数多く調査され、弥生時代

中期から後期、さらには古墳時代から平安時代にかけての水田跡に伴う水路などからおびただしい数の木製品が出土し、そこから木製農具も数多く発見されています。木製農具が出ている長野市内の代表的な遺跡としては石川条里遺跡(弥生時代中期から古墳時代前期と平安時代の農具)、川田条里遺跡(弥生時代中期から平安時代の

### 道具・木製農具①

農具)、榎田遺跡(古墳時代中期から後期の

耕具である鍬(くわ)や鋤(すき)、整地に

## 鍬と鋤 作業の主力 土木全般にも使われる

農具などが挙げられます。まず農作業に当たっては開田や開墾、もしくは田起こしなどの起

め遺跡の発掘調査では出土例が最も多いものは田や杵(きね)、田下駄、槌(つち)などさまざま道具が知られています。

弥生時代前期の鍬や鋤は、すべて木で作られていましたが、弥生時代中・後期には木製

に画期が訪れます。耕作力を飛躍的に増大させるため、鉄製刃先を鍬や鋤の先端だけに、周囲をU字形に

作力の向上ばかりでなく、それまで掘削にかなりの労力を要した造成(岩盤や硬い地層など)を効率良く、かつ可能にしました。

鳥時代から奈良時代前半の馬鋤が出土しています。鉄や畜力(馬・牛)の導入は稲作伝来以後広がったといわれる財力の差をさらに加速することとなり、社会変革の要因の一端を負っていたといえるでしょう。



古墳時代の農具(石川条里・川田条里遺跡出土、県立歴史館所蔵)＝県埋文センター10周年図録より



これらは畑や水田に関する農耕具であると同時に、ある面では土木作業全般に使われた機具といえます。特に木製農具の中でも鍬と鋤は当時の農作業の中で主力となり、そのた

の本体に鉄製の鍬先や鋤先(耕作時のダメージを受けやすい刃の先端部分のみ)を取り付けて使用されるようになります。

そして5世紀中ごろの古墳時代中期には耕

くわ)の出現といわれ

では、榎田遺跡の5世紀中ごろの時期の自然の流路跡から多数出土しています。その形の鍬や鋤は現代のつい最近まで使われていました。「U字形刃先」の登場は耕

藤原直人・県埋蔵文化財センター調査研究員

# 古代への招待状

## 埋もれていた遺産

25

約3万数千年前—  
万数千年前まで氷河時  
代に暮らしていた旧石

器時代人。彼らはどの  
ような住居に住んでい  
たのでしょうか。

旧石器時代の遺跡を  
発掘調査すると、石の  
かけらが直径4〜5㎝  
の範囲にまとまって数  
十点から多い時には数  
十点出土します。これ  
を考古学ではブロック  
とか、ユニットなどと  
呼んでいます。

このブロックを構成  
する石のかけらは、石  
槍(いしやり)やナイ  
フ形石器といった石器  
(石の道具)と石器を  
作ろうとして打ち欠い  
たときに出た石片類で  
す。つまりブロックは  
旧石器時代の人々が石  
器を作った作業の場  
であったと同時に、石器  
を使用し、使用に耐え

### 住居・ブロック礫群

## 石器製作や調理の場 狩りをしながら遊動生活

なくなつたものを捨て  
た場であつたと考えら  
れています。  
石器にかかわる製  
作、使用、廃棄の場、  
言い換えれば旧石器時  
代人の作業のいろいろ  
な場面が集約されてい  
る空間であつたと推定  
されます。



3万数千年前、野尻湖周辺信濃町日向林(ひなたばやし)B遺跡のムラの推定復元模型。ここでは屋外で作業や調理を行ったと推定される

れています。  
ブロックとは別に赤  
く焼けた河原石が集中  
して発見されることが  
あります。これを礫群

で焼かれた石の上に肉  
を直接載せて焼いた  
り、木の葉などに包ん  
だ肉を蒸し焼きにした  
ことが想像されていま  
す。

つまり、礫群は調理  
の場であつたと理解さ  
れています。ほかに炭  
粒の集中や焼け土の跡  
なども発見され、礫群  
とともに火の使用にか  
かわる場であつたこと  
が想定されています。

作業の場としてのブ  
ロック、調理の場とし  
ての礫群までは分かっ  
てきました。では旧石  
器時代人は一体どこで  
寝起きしていたのでし  
ょうか。現時点ではよ  
く分かっていません。  
縄文時代以降になる  
と、しっかりと大地を

掘り込んだ竪穴住居を  
造り、定住生活をする  
ようになりませんが、旧  
石器時代は狩りをしな  
がらの「遊動生活」を  
送っていたと考えられ  
ています。おそらく、  
そう太くはない木を数  
本束ねた円すい状の骨  
組みに動物の毛皮や木  
の皮などをかぶせた簡  
易なテントの仮小屋が  
彼らの住居であつたと  
考えられます。

また、ブロックと礫  
群が重なって発見され  
る例もよくあります。  
飯綱高原上ケ屋(あげ  
や)遺跡では5カ所の  
ブロックに重なるよう  
に同数の礫群が発見さ  
れています。その上に  
5棟のテントを建てて  
みましょう。屋内で石  
器作りの作業や、調理  
を行った旧石器時代人  
の姿が見えてきません  
か。

大竹憲昭・泉埋蔵  
文化財センター主  
任調査研究員

# 古代への招待状

## 埋もれていた遺産

26

今、皆さんはどんな住まいで暮らしていますか。「家」と一言で

ますが、基礎の上には柱が建ち壁を持った構造は同じです。また、中は居間や台所などいろいろな部屋に分かれていると思います。

さて、縄文時代の人たちは一体どのような住まいに住んでいたのでしょうか。縄文時代の住まいは竪穴住居と呼ばれるものが一般的です。

竪穴住居とは地面を掘りくぼめて床とし、その中に柱を建て、草などで屋根をふいた構造の住居をいいます。住居の中央部には炉(いろり)が造られて

言っても木造の一戸建て、コンクリートの高層アパートなどさまざま

### 住居・竪穴住居

## 形や大きささまざま 平安時代まで使われる

います。しかし、柱材や屋根材などは長い年月の間に朽ちて、住居の上屋構造は残っていないので、発掘調査では、住居のくぼみや柱

の形や大きさなども変化を遂げています。形では円形やた円形のものが多いのですが、時

度が一般的といえます。これは約6畳ほどの大きさとなります。6畳一間のワンルームとい

はないでしょうか。炉の構造も床をたたききとります。6畳一間のワンルームとい

では縄文時代の住居跡はそれほど多く発見されているわけではありませぬ。浅川の松ノ木田遺跡、松代町の松原遺跡や村東山手遺跡、

東日本では縄文時代以降平安時代までの長い間、一般的な住まいとして使われ続けます。



縄文時代の竪穴住居復元図(県埋蔵文化財センター10周年図録より)



縄文時代の竪穴住居跡(御代田町川原田遺跡)＝浅間縄文ミュージアム提供

穴、炉の跡などが見つかることとなります。縄文時代は約1万年もの長い期間があるの

期によっては四角い住居が主体となる時期もあります。大ききもさまざまですが、直径4〜5メートル

つたところでしょうか。現在のよういろいろな家具などがなければ一家が住むにはそれほど狭くはなかったのだ

川原石で囲ったものなどいろいろなものが時期によって流行します。

長野市内  
廣瀬昭弘・県埋蔵文化財センター調査第一課長

# 古代への招待状

## 埋もれていた遺産

27

長野自動車道猿掛サ  
ービスエリア(SA)か  
ら眺める千曲川とその  
両岸に広がる平地は、豊  
かな恵みをもたらせて

くれる大地の存在を彷彿(ほつふつ)させま  
す。それは、弥生人にと  
っても同じ思いだった  
ことが、高速道建設に

先立つ発掘調査で次々  
に明らかになりました。

SAから善光寺平へ

降り立った一帯が、石  
川条里遺跡、篠ノ井遺  
跡群、長野インターチ  
ェンジ(IC)を過ぎ  
た一帯が松代の松原遺  
跡、若穂の春山遺跡、  
綿内の榎田遺跡と、弥  
生時代の大集落の一端  
が、約2000年の時  
を経てわたしたちの目  
の前に現れました。

千曲川両岸に広がる  
自然堤防上は今、集落域  
になっていますが、その  
風景は弥生時代と同じ  
でした。それは、高速道  
建設に伴う発掘調査だ

建てた竪穴住居でした。  
中期後半のころの住ま  
いは、平面形が円形、だ  
円形、隅丸長方形であつ  
たりします。中央に炉を  
置き、それを取り囲むよ

さて、弥生時代の集  
落は、どんな住まいで  
構成されていたのでし

## 「竪穴」が最も一般的 形に統一性 社会の証し

### 住居・弥生人の住まい

けではなく、さまざま  
な発掘調査から明らか  
にされてきています。

ようか。  
最も一般的な住まい  
は、地面を掘りくぼめて

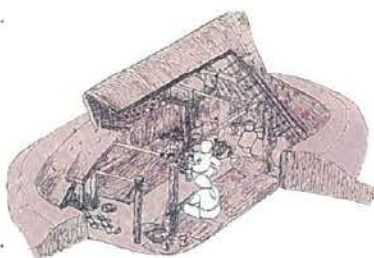


篠ノ井遺跡群の竪穴住居 (県立歴史館提供)

上屋を築き、柱と柱の  
中間下には炉を、炉の  
反対側の壁際には入り  
口施設を造りました。

土する遺物もそれぞれ  
ですが、平面形や内部  
施設などの基本形は同  
じで統一性がありま  
す。個々の竪穴住居は、  
それぞれの背景・目的

ています。しかし、統  
一性のあることは何ら  
かの規制なり慣習なり  
があつたこと、それを  
共有しながら社会生活  
を営んでいたことを教



竪穴住居内部の様  
子(赤い土器のク  
ニより推定)

うに柱を立て、桁(け  
た)や梁(はり)を渡  
して上屋を築きます。

可能性があります。  
篠ノ井遺跡群から発  
見された後期の竪穴住  
居を比べると、その大  
きさが大形、中形、小  
形、極小形とあり、出

を持って建てられ、そ  
れぞれ固有の顔も持つ  
集落内には、竪穴住



◇竪穴住居の大きさ 篠ノ井遺跡群からは、150軒余の弥生時代後期の竪  
穴住居が発見され、大きさはさまざまであった。そこで、平面形で長軸9  
0㎝・短軸5・7㎝程度を大形、同6・9㎝・5・4㎝程度を中形、4・9  
㎝・4・2㎝程度を小形、3・0㎝・2・6㎝程度を極小形としてとらえた。

居のほかは平地住居、  
掘った柱の建物があ  
りました。平地住居は、  
松原遺跡から150軒  
余発見されました。時  
期は中期後半で、幅約  
30-40㎝、深さが検出  
面から平均10㎝の溝が  
円形に巡り、内部に柱  
や炉がある建物です  
が、後期へは継続しな  
いようです。掘った柱  
の建物は、1間×1  
間から8間×1間とそ  
の規模に違いがあり、  
平地式建物、高床式倉  
庫、やぐらなどの性格  
が考えられています。

市澤英利 県埋蔵  
文化財センター調  
査部長

# 古代への招待状

## 埋もれていた遺産

28

日本では今から約1万3000年前の縄文時代以来、竪穴住居の中央部に炉が置かれ、調理・照明・暖房・除

湿・火種保存などの機能を果たしてきました。それが5世紀中ごろから6世紀にかけての古墳時代中・後期に

なると竪穴住居内にカマドの出現という大きな変化が起こります。カマドは竪穴住居の壁際に設置された調理専用の厨房(ちゆうぼう)施設で、竪穴住居内に台所空間が成立したことになる。

カマドは中国大陸に起源を持つもので、朝鮮半島から渡来人によって日本に伝えられました。日本で、壁面にカマドを造り付けた竪穴住居が出現したのは3世紀から4世紀初頭で大阪府の遺跡で発見されています。

その後、5世紀初頭に

## 中国大陸から伝わる 空間利用や調理法変化

### 住居・カマドの出現

北九州をはじめ大阪府や奈良県を中心とする近畿地方に広まり、5世紀初頭に定着していきました。長野市上松の長野高校敷地内に当たる本村

東沖遺跡では、5世紀の古墳時代中期の集落が発掘されました。調査の結果、5世紀中ごろにカマドが導入され、5世紀後半にはほ



本村東沖遺跡30号住居跡。上方はカマド跡、柱穴に当たる穴跡から間仕切り跡の溝が伸びる(市埋蔵文化財センター提供)

と出現の最も早い事例の一つであり、本村東沖遺跡が新来文化を積極的に受け入れた拠点的な集落であったことがはっきりしました。西に



カマドを用いた家(県埋蔵文化財センター10周年図録より)

ころに大和政権と結び付きが強かった善光寺平南域や飯田市域を中心とする下伊那地域での拠点的な集落にいち早くカマドが導入され、

ほとんどの竪穴住居で使われていたことが分かりました。この使用例は、長野市若穂の榎田遺跡や飯田市内の遺跡とともに長野県内におけるカマ

隣接する地附山(じつぎやま)古墳は全長39mの小型の前方後円墳で、この時期にこの地域を支配した有力豪族の墓と考えられます。このように、5世紀中

6世紀には県内全域に定着していきました。カマドの出現は人々の生活スタイルに大きな変化をもたらしました。カマドを用いたとで、炉を使っていた



ころよりも住居内の空間利用が広がり、本村東沖遺跡の竪穴住居跡に見られるように、住居内を間仕切りすることによって目的別の空

間を生み出しました。また、煙道(えんど)の併設は熱効率を高めるのに効果的でした。◇煙道 煙を室外へ出すトンネル状の穴 ◇銘銘器 食物を一人一人に取り分けるための器

高め、糲(もち)米を蒸した強飯(こわめし)や携行食の糲(ほしい)など、調理方法が多様化しました。さらに、カマドで煮炊きを用いる糲(かめ)の長期化や蒸し器である甑(こしき)の大型化をもたらしました。これらカマド使用による生活スタイルの変化と時を同じくして、銘銘器(めいめいき)と思われるおわん形の「坏(つき)」という食器類の増加も見られるようになりました。

宮脇正実・県立歴史館専門主事兼学芸員

# 古代への招待状

## 埋もれていた遺産

29

奈良・平安時代の役所は、中央と地方のものに分かれます。中央には平城宮や後の平安宮などの宮がありました。地方には東

とに郡衙(ぐんが)が置かれていました。さらにその下の郷に郷の役所である郷衙(ごうが)があったとする考え方もありますが、これには異論もあります。

このほか、中央と地方を結ぶものとして、現在の国道に当たる官道におよそ30里(約16km)ごとに命令の伝達や公務旅行者のために馬を常備した駅家(うまや)がありました。

これらの役所の中心となる政庁の建物は、国府では方形区画の北側に正殿、南側の東西に脇殿が配される「コ」の字型配置が一般的で、郡衙

西の要衝に鎮守府(多賀城、後に胆沢城)と大宰府、現在の県に当たる信濃などの国(こと)に国府、その下の水内郡・更級郡などの郡(こ

でも同様の「コ」の字型やその変形の「品」字型、「ロ」の字型配置を取っています。地方にあつて

### 住居・古代の役所

配置の縮小版となっており、中央の地方支配の意識が見て取れます。このほか、国府には

## コの字型の建物配置 地名や遺物で位置推定

も、北側に大極殿院、その南側の東西に南北棟が並ぶ朝堂院が配された平城宮など、宮の官衙

政所・税所などの「所」と呼ばれる各種の施設、国司の住まいである館舎、それに学校などがあり、郡衙にも倉が立ち並

や木簡・墨書土器などから分かっています。長野県内には、信濃国と、奈良時代に一時分国された諏訪国の2



県町遺跡出土の跡脚硯(市立博物館所蔵)「長野市の文化財」より



屋代遺跡群出土の国符木簡(県埋文センター)「長野県屋代遺跡群出土木簡」表紙より

んだ正倉院、郡司の住まいである館(たち)、郡司の食事を用意した厨(くりや)などの施設があつたことが、文献

つこの国府、伊那・諏訪・筑摩・安曇・更級・水内・高井・埴科・小県・佐久の10の郡衙があつたと考えら



に官営だつたと考えられる神社や寺院の存在、国府では「こつ」府は、奈良時代に国分寺のある上田市に置かれたものが、平安時代に

◇里 令制では、1里は5町で約545m。後に6町約655mを経て36町約3.9kmになった

◇大極殿院 天皇が政務を執り行った所

◇墨書土器 墨で字を記した土器

上田真・県埋文文化財センター調査研究員

れませんが、残念ながら飯田市の恒川(ごんが)遺跡で伊那郡正倉院と見られる掘立柱建物が発見された以外、役所の建物跡は発見されていません。

ただし、建物自体の発見はなくても、古代土などから、間接的に古代の役所の存在を推定することができ

長野市周辺でも、千曲市の屋代遺跡群では国符木簡が出土したことから信濃の初期国府または埴科郡衙が、長野市の県町遺跡では跡脚硯が出土したことから水内郡衙が、付近に存在したと推定されています。

# 古代への招待状

## 埋もれていた遺産

30

13世紀の鎌倉時代には農業技術が進歩し、水路などの灌漑(かんがい)設備が整うにつ

成立を前の時代に当たる平安時代末のムラと比較してみると、一度途切れた後に再び造られたり、以前のムラとは異なる場所に造られるようになったことが、発掘調査からうかがい知ることが出来ます。

この平安時代の末から鎌倉時代にかけての大きなうねりは、新しい開発の時代の幕開けともいわれています。

この「鎌倉のムラ」にかかわる良好な遺跡は、残念ながら長野市内では調査されていません。長野市の隣の千曲

れ、稲作の生産力が高まると同時に、新しいムラの形が成立してきます。この「鎌倉のムラ」の

市では、この「ムラ」と思われるまとまった建

自動車道建設に先立ち更道ジャンクションよ

### 住居・鎌倉のムラ

## 稲作の拠点 開発盛ん 建て替えて柱穴無数に

物跡が発掘によって確認されています。上信越

り南側、水田が広がる約2・3㎡の区間が発掘調査されました。更道

中でも、比較的建物跡が少ない西側と、無数にある東側に分けられることが分かりました。



千曲市屋代遺跡群での中世集落遺構 (県立歴史館提供)

と呼ばれる遺跡です。調査の結果、13世紀ころの建物の跡が多数見つかりましたが、その

西側には、その柱穴の位置と大きさから、四方に庇(ひさし)を持った、集落の中心的

建物があったと考えられます。これは「屋敷」と見ていいでしょう。それに對し、柱穴の多

が行われていたと考えられます。また、周囲には条里水田と思われる区画や畑の畝跡も見つかりました。



松本市北栗遺跡の中世のムラ復元図(県埋文センター10周年図録より)

い東側は「別の建物」、例えば単純な造りの住居や倉庫などが集中し、短期間で建て替え

の大規模な再開発が行われていたことを推察させます。さらに、このときできた水田は、

つかりました。

この一帯は、いったん10世紀後半に幹線用水の工事が行われたものの、洪水によってすぐに埋没してしまいましたが、その後、12世紀から13世紀の鎌倉時代に再び水田が広がっていたことが分かってきたのです。これは、鎌倉期に用水路から15世紀になると、用水ではなく、堀で区画された「屋敷」という形の集落として現れます。

豊田義幸・県埋蔵文化財センター調査研究員

# 古代への招待状

## 埋もれていた遺産

32

縄文時代の住居跡は一般的には地面を掘りくぼめた竪穴住居跡と

にかけて、住居の床に扁平(へんぺい)な石を敷き詰めた「敷石住居跡」が出現し流行します。

敷石住居の形は一般の竪穴住居と同じ円形もありますが、円形の住居に出入り口の張り出し施設が付いた形態のものも多く、「柄鏡形敷石住居跡」とも呼ばれています。

こうした敷石住居の出現には、「敷石」と「張り出し部」といった住居施設の変化が関係していると考えられます。敷石は住居内に造られた石壇や石柱と

いった石を用いた施設、張り出し部は住居入り

## 4000年前以降に流行 出入口張り出し付く

### 住居・敷石住居

呼ばれるものですが、今から4000年前以降の中期後半から後期

口部に埋め壘(かめ)を設置した施設で、この2つが結合し拡大し、関東地方が最も多く、西日本では少ない傾向がうかがえます。



村東山手遺跡の敷石住居跡 (県埋蔵文化財センター提供)

て敷石住居が成立したとも考えられています。敷石住居跡が発見される地域は中部地方が

長野県は出現期の敷石住居の発見例が多く、発生に関係した地域とも考えられています。



望月町平石遺跡の敷石住居跡 (平石遺跡報告書より)

住居内に施される敷石には、住居全体あるいは炉の周辺に敷くもの、張り出し部から炉にかけて敷くものなどいろいろな形態が見られます。

あつたとする説などありますが、現在では当時の一般的な住居構造の一つとして考えられるようになってい

敷石には、遺跡近くで採れる扁平に割れやすい性質の石材が用いられています。当時の人たちはどのような思いで石を

運び、住居に敷いたのでしょうか。

廣瀬昭弘 県埋蔵文化財センター調査第一課長

# 古代への招待状

## 埋もれていた遺産

33

長野オリンピックの開会式場となった篠ノ井東福寺の南長野運動公園。この地下には、貴重な遺跡が眠っていました。

オリンピックを機に1000年の歳月を経て、わたしたちの前に姿を現したのは南宮(なみやう)遺跡です。ここからは、誰も予想

していなかった1000軒を超える平安時代の住居跡が発見されました。工事に伴う調査期限が迫る厳しい状況の中で、長野市埋蔵文化財センターを中心に、多くの人の努力によってわたしたちの前に当時の姿を見せました。

南宮遺跡は、平安時代とともに始まり、平安時代後期には幕を閉じてしまつ遺跡です。仁和4(888)年、北信地方は空前の大洪水害に襲われたことが記録に残っています。県内ではこのころを機に、集落が急速に終息していつてしまします

### 住居・古代のムラ

が、南宮遺跡は逆に拡大を遂げていきます。その理由は、強力な指導者を得たことが大き

な人物だったのでしようか。ほかの遺跡ではあまり見られない特別な遺物や遺構など

## 1000軒超す南宮遺跡 遺物 強力な指導者示す

かったようです。荘園の領主の住む村、それが南宮遺跡なのです。領主となった人はど



南宮遺跡とオリンピック開閉会式場 (市埋蔵文化財センター提供)

が、具体的な人物像を教えてくれます。まず名前ですが、出土した陶製の印鑑から「宗清」という人物名

の礼装用衣服に使用されたものかもしれない。八稜(はちりょう)鏡の出土も身分の高さを表しています。この人物の住まいは、

溝に囲まれた区画の中に大型の竪穴住居や掘立柱建物などが立ち並び、たくさんの鍛冶(かじ)工房を持つなど他と隔絶した力を示すも

していたと思われる。そこから出土した多くの土器や灰釉陶器などは、農業労働力を確保するための饗宴を催し、酒を振る舞うために使用されたと思

まれません。こうしたますます力を蓄えていったと考えられます。このほか、発見された土鍾(どすい)や軽石製の浮子(うき)などから、千曲川で漁労をし、そ上するサケなどを捕まえ、加工していたと考えられます。他の遺物からは布や漆の生産もしていたことが分かります。このように、経済的にも政治的にも力を付けた集落の中では、ほとんどの物が生産され、大量に消費されていたと考えられます。



「宗清」銘の印 (市埋蔵文化財センター所蔵)

役人が使用する帯金具の出土で、地方の役所(郡衙)など

東西・南北とも100(約1町)の方形のふさわしい屋敷構えを

ので、領主と呼ぶのにふさわしい屋敷構えを

る付け札の木簡を削るのにも使用されたのか

す(は、都に送る付

に關連した官僚であったと思われま

に古代のアイロン、火熨斗(ひのし)も役人

製や石製のものがあ

品。ひもを通せるように中空にな

を、すずりの代用品として使用したものを、すずりの代用品として使用した土製

石上周蔵 県埋蔵文化財センター調査研究員

# 古代への招待状

## 埋もれていた遺産

34

現代では、家の屋根に「瓦をふく」ことは決して珍しいことではありませんが、瓦屋根が一般的となるのは明治時代以降のことで、それ以前は「草ぶき」「板

ぶき」の民家が普通でした。日本に瓦を作る技術が伝えられたのは、6世紀後半の飛鳥寺造営のころとされていますから、瓦が一般に普及

するには、かなり時間がかかっているわけですね。

長野県内では奈良時代の少し前、7世紀後半ごろの遺跡から瓦が出土しはじめます。東

筑摩郡明科町の明科廃寺跡や千曲市の兩宮廃寺跡などが知られ、古代の寺院や役所の造営を契機に、県内に伝えられたものと考えられます。

長野市内では、以前から篠ノ井石川の石川廃寺跡や現在の善光寺境内周辺の元善町遺跡(善光寺の前身寺院)などが古代瓦が採集された場所として知られていましたが、発掘調査による古代瓦の出土は昭和59年―60年に行

った若槻の「浅川扇状地遺跡群牟礼バイパスB・C・D地点遺跡」

(以下牟礼バイパス遺跡)での調査などに限られています。この遺跡では、平安時代の集落が確認され、竪穴住居跡などから土器など

## 近くに窯跡の可能性 寺院や役所造営で県内に

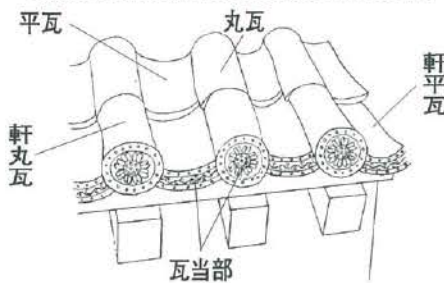
とともに、古代瓦が出土しています。ではどんな瓦だったのでしょうか。

うか。

日本の瓦屋根には「丸瓦」と「平瓦」を組み合わせて「本瓦ぶき」と、両方の機能を兼ね備えた「棧(さん)瓦ぶき」とがあり、現在一般的に住



牟礼バイパス遺跡から出土した軒平瓦



丸瓦も平瓦も軒先には「瓦当部(がとう)」という文様を持つ「軒丸瓦」と「軒平瓦」が用いられました。牟礼バイパス遺跡では、これら軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が合わせて

「がた」からの型抜きによるもので、同じ型の焼き損じ品が含まれていることから、近く

に窯跡があり、牟礼バイパス遺跡の集落に瓦が持ち込まれ、さらに元善町遺跡に瓦が運ば

れた可能性も考えられます。

宅で使用する「棧瓦」は江戸時代に考案されたものです。「本瓦ぶき」で屋根をふくには、軒先から棟に向けて平瓦をふき重ね、平瓦の列の間を丸瓦の列で覆

いかふせます。

約200点出土しており、軒丸瓦には「蓮華文(れんげもん)」、軒平瓦には「唐草文(か

らくさもん)」の文様が施されていました。これら瓦当文様は、普通、木製范型(はん

の流通が理解できます。

一方、牟礼バイパス

◇瓦塔 土製の小塔で三重や五重の塔などがある。須恵器(すえき)と同じように1000度以上の高温で焼成されるものが多い。

◇鷗尾 寺などの大きい建築物の屋根の両端に取り付けられた魚の尾ひれの形をした飾り。

出河裕典 昭和小学校教諭

このように瓦の存在は古代の善光寺平に瓦ぶき屋根の建物があった証拠であり、その建物は寺院などの社会的・経済的な役割を示すシンボリックな役割を果たしていたと考えられます。

住居・古代の瓦

# 古代への招待状

## 埋もれていた遺産

35

戦いに備えて堀と土塁(どるい)・堀で守りを固めた中世の武士の屋敷を館(や

国時代の居館跡があり、昭和40年代に都市化が進むと、開発によって多くが破壊されてしまいました。

中野市にある高梨氏館跡は四方に土塁や空堀がよく残り、県下でも随一の居館跡として知られています。居館の大きさは南北1000

かた)や居館(きよかんと)と呼びます。長野市内には中越館・押鐘城・盛伝寺館(いすれも吉田)など室町・戦

### 住居・武士の屋敷

## 土塁や空堀 庭園も 県下でも随一の高梨氏館

井都小布施町から中野地方に進出し、中野氏を滅ぼして本拠地としました。居館跡は、昭

和61(1986)年から平成5(1993)年まで史跡公園整備のため発掘調査が行われました。

個の石組みがあり、その前面に池が広がっていました。池の岸は山石や河原石で、複雑な線を構成しています。

例は、全国的にも珍しい高梨氏は三条西実隆ら京都の文化人と親交があり、積極的に京

の屋敷をモデルとした屋敷が地方でも造られるようになりまし

(ついじべい)が埋まっていた。これにより、土塁が築かれる以前には築地塀が巡らされていたことが分かりました。



県下で随一を誇る高梨氏館跡



高梨氏館の土塁(右)と空堀(中央のくぼみ)の跡



居館内の東部分から建物跡10棟が検出され、このうち主殿とみられる建物の南側に庭園が造られています。庭園の南東隅に3

池の周囲には回遊式の園路が設けられ、池の中央には「中島」とみられる石組みもありま

都の文化を取り入れました。こうして室町時代には、京都の將軍

横断面を調べたところ、中央に幅1.5m、高さ2.2mの築地塀

酒井健次・長野県立歴史館専門主任・学芸員

22日から14面に掲載します

# 古代への招待状

## 埋もれていた遺産

36

鎌倉時代の僧で「踊念仏」で知られる時宗開祖の一遍が、全国行脚している様子が描か

の中に「掘立柱」と思われる建物が何棟か見えます。

上信越道更埴ジャンクション(JCT)ー五里ヶ峯トンネル間にある屋代・更埴条里遺跡では、11世紀まで見られた竪穴建物跡が12世紀になるとほとんどなくなり、何棟かの掘立柱建物跡のみが同時にあった状況が分かりました。

中世では平安時代まで見られた竪穴建物が減少し、掘立柱建物が広く用いられていくというのが一般的な説で、このことが長野市

の中にも「掘立柱」と思われる建物が何棟か見えます。

れた「一遍上人絵伝」には善光寺や佐久の場面があり、そこには堀や溝で囲まれた屋敷地

を含む善光寺平でも発掘の中で明らかになっ

てきました。おそらく一遍上人の絵に近い建物が見られたと考えられています。

### 住居・中世人のすまい

## 「掘立柱」が広く普及 さまざまな建物が存在

また、他県の遺跡でも掘立柱建物の内部が幾つかの部屋に分かれていたと考えられる

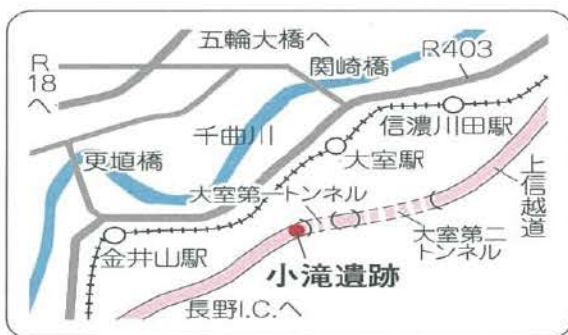
また、他県の遺跡でも掘立柱建物の内部が幾つかの部屋に分かれていたと考えられる



松代町大室の小滝遺跡の建物跡 (県立歴史館提供)

例が見つかり、掘立柱建物の普及は建物内を部屋に区切る使い方も進んだと考えられま

また、他県の遺跡でも掘立柱建物の内部が幾つかの部屋に分かれていたと考えられる



立柱建物跡のほかに竪穴建物跡が見つかって

これ以外に基礎石の上には建物建てる礎石もありません。礎石建物もありません。礎石建物は梁(はり)と組み合わせないと柱は

活の中心は掘立柱に移り、竪穴は例えば貯蔵

組み合わせが複雑になることから寸法も正確に取る必要がありまし

た。

つまり、技術的な面からみると竪穴建物よりも掘立柱建物、それが遺跡で見つかる建物跡から土地(この生活スタイル)や社会構成がうかがえると考えられています。

このように中世にはさまざまな構造の建物が存在し、それぞれ用途や、技術・材料の入手方法をはじめ、階層や職業の違いなど住む人によっても構造や規模が異なっていたと推測されています。県内各地域で建物によって構成が違う様子もあり、遺跡で見つかる建物跡から土地(この生活スタイル)や社会構成がうかがえると考えられています。

中野亮一 県埋蔵文化財センター調査研究員

# 古代への招待状

## 埋もれていた遺産

37

旧石器時代は動物の狩りしながら移動生活をしてきた時代で

1を着ける精神的な余裕があったのでしようか。日本全国には5000力以上の旧石器時代の遺跡があるといわれていますが、アクセサリーといえるものが出土した遺跡はわずか数遺跡しかありません。

そのような中、上水内郡信濃町の日向林(ひなたばやし)B遺跡ではアクセサリーの可能性のある石器が見つかっています。この遺跡は磨製の石斧(せきこ)や台形石器(たいけいせつき)と呼ばれる石器がたくさん出

す。そのような生活を送っていた人々に身を飾るようなアクセサリー

### アクセサリー・旧石器時代

## 最も古い有孔石製品 精神的ゆとり生まれる

土したことで有名な約3万年前の遺跡です。

アクセサリーと思われ、厚さ約3センチの大きさ品(ゆづこうせきせい)で、中央に直径約2センチの穴が貫通して



日向林B遺跡で見つかった有孔石製品

ひん)と呼ばれています。色は赤褐色で、砂岩という岩石が使われ

ています。直径約4センチ、中央に直径約2センチの穴が貫通して

品(ゆづこうせきせい)で、中央に直径約2センチの穴が貫通して



の穴が貫通しています。残念ながらこの穴は人工ではなく、自然の砂岩の有孔石製品は

にできたものと思われる。現在の宝石のように美しい色であったり、キラキラ輝いているわけでもありません。穴の開いた石が珍しかった

のではありません。穴の開いた石が珍しかったのでしようか。本当にアクセサリーとして使用されたかどうかは分かりませんが、実用的な道具ではないと考えられます。アクセサリーと考えると、まだまだ類例は少ないですが、3万年前の旧石器時代の人々は狩猟だけでなく、有孔石製品のような非実用的な道具を持ち歩く精神的な「ゆとり」を持っていたと考えてもよいでしょう。

谷和隆 県立歴史館専門主事・学芸員

# 古代への招待状

## 埋もれていた遺産

38

人が身を飾る(おしやれ)のは、世の常でしよう。それにしても

大昔には一体どういった身の飾り方をしていたと考えられるのでしょうか。

遺跡から発掘された資料から、主に2つの方法が考えられています。一つはきれいな石、貝殻などで身を飾ること、現代風に見える「アクセサリー」です。もう一つには服装や入墨(いれずみ)などもあったことが土偶(縄文時代の焼き物の人形)などから推測されています。

ここでは、縄文時代の遺跡からよく発見されるアクセサリーについて考えてみたいと思います。現在、アクセサリーは

## 骨や貝から石に変化 種類も格段に増える

### アクセサリー・縄文時代前期

おそろしく旧石器時代に

今から約9000年前(縄文時代早期)に

その後、今から約6500年前(縄文時代

5000年前(縄文時代

たと推測されているの

に似ていることから、名付けられた。

リング



松原遺跡出土のアクセサリー (県立歴史館所蔵)

になると、骨、サメの歯や貝殻などで作られたアクセサリーが長野県内でも高山村湯倉洞窟(ゆゑのくわ)・南

早期末)になってアクセサリーは大きく変化します。光ってきれいで、きめが細かい石(玉・ギョク)で作ら

滑石に比べ硬くてきめが細かい軟玉(なんぎよく)で作られたものもあります。

で、現代風にいえばピアスの一種です。また、もう少し時代が新しくなると長野市松原遺跡出土のアクセサリーの

出ているものがあること、一斉に日本列島で使われるようになることから、大陸から新しい「おしやれ」の文化が伝わってきたと考えられる人もいます。



耳飾をする女性(横沢晃・作画)

ことも特徴的です。耳飾(イヤリング)・垂飾(ペンダント)・指輪などがあつて、特徴的なものが伊豆諸島八丈島倉輪(くらわ)遺跡など

サリィは非常に珍しいもので、そっくりのものが伊豆諸島八丈島倉輪(くらわ)遺跡など

川崎 保・長野県立歴史館専門主事・学芸員

これらアクセ

の形、ヘラ形、帽子形などが出てきました。これらアクセ

「の」の

の形、ヘラ形、帽子形などが出てきました。これらアクセ

の形、

の形、ヘラ形、帽子形などが出てきました。これらアクセ

の形、

の形、ヘラ形、帽子形などが出てきました。これらアクセ

の形、

の形、ヘラ形、帽子形などが出てきました。これらアクセ

の形、

の形、ヘラ形、帽子形などが出てきました。これらアクセ

の形、

の形、ヘラ形、帽子形などが出てきました。これらアクセ

の形、

の形、ヘラ形、帽子形などが出てきました。これらアクセ

# 古代への招待状

## 埋もれていた遺産

39

アクセサリーは、人類社会の中であって人それぞれが社会的立場を示すために作り出し

アクセサリーは飾りまです。現代流行しているピアスは、もちろん今日のアクセサリーですし、タトゥーと呼ばれる刺青(いれずみ)も身体装飾という意味で、同じ性格のもと考ええてよいでしょう。

では、弥生時代のアクセサリーには、一体どんなものがあったのでしょうか。長野市松代町東寺尾にある松原遺跡を例に考えてみると、木製で赤漆(あかうるし)の塗られた縦櫛(たてぐし)、ヒスイ製の勾玉(まがたま)に碧玉(へきぎょく)に

た道具です。髪飾り、首飾り、耳飾りに鼻飾り、腕輪に指輪など、人目を引く人体部分を

製の指輪、猪牙(いのししのきば)製の腕輪

製の管玉(くだたま)、蛇紋岩(じゃもんがん)

などが挙げられ、これらがアクセサリーの種

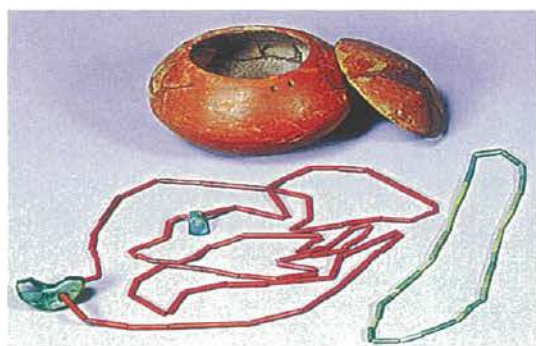
ただし、これらの種類が1、2点程度しか出土していないところ

少し場所は離れます

# 社会的立場示す道具

## 役割終わると不必要に

### アクセサリー・弥生人と玉



篠ノ井・光林寺裏遺跡出土の玉類(至文堂発行「日本の美術」第370号「弥生時代の装身具」より=東京国立博物館所蔵)



檀田遺跡出土のヒスイ製勾玉。長さ4.2センチと大きい(市埋蔵文化財センター所蔵)

類と判断できそうであるに、弥生社会の中でのアクセサリーの役割を

が、飯山市に小泉遺跡という弥生時代の墓地を発掘した例がありま

す。そこには94ほどの墓跡がありましたが、ヒスイ製の勾玉と管玉を



は、それぞれ管玉の数が違って、44個・24個・12個・9個・6個でした。ところが、墓の大きさや場所に違いはありません。

このことから弥生のアクセサリーは、ファッションを意味するものではなく、社会を構成する人の役割、つまりムラのリーダーであったり、

社会の大きな移り変わりでアクセサリーの役割が失われるとき、人々は、それを宝器として山中に埋めるのだと考える考古学者もいます。事の真意は分かりませんが、長野市篠ノ井にある光林寺の裏山からは、弥生時代の赤く塗られた小さな壺(つぼ)とともに、ヒスイ製の勾玉2点と管玉105点が発見されています。

持った1つ、その後継者、あるいは祈禱師(きとうし)、勇敢な戦士などを表現する飾り物だと考えられます。そしてアクセサリーは、その人の社

管玉を持つ5つの墓

町田勝則・泉埋蔵文化財センター調査研究員

# 古代への招待状

## 埋もれていた遺産

40

長野市篠ノ井塩崎の石川条里遺跡。長野自動車道の建設に先立つ発掘調査により、この

遺跡の一角で4世紀終わりごろの大規模な祭祀(さいし)場が発見されました。

ここで行われた祭祀の特徴を示すものが車輪石(しゃりんせき)・石釧(いしくわ)・銅鏡・銅鏃(やぐら)・玉類といった古墳の副葬品と共通する品々で、遺跡の北方3<sup>米</sup>に位置する同時期の川柳(せんりゅう)將軍塚古墳の被葬者との関係が想定されています。とりわけ注目されるのが車輪石と石釧です。車輪石は、江戸時代の古記録から川柳將軍塚古墳から出土した可能性が考えられるものの、現存するものでは県内初出土です。石釧も県内では須坂市鏡塚

### アクセサリー・腕輪形石製品

## 儀礼に使われる宝器

### 穴は小さくなり重量化

1号墳のほか、数遺跡でしか見つかっていま

せん。車輪石・石釧、そして鍬形石(くわがたいし)は、弥生時代の貝(は)は勾玉(まがたま)や4世紀代の古墳の副葬品を構成する重要な要素となります。材料に



滋賀県安土瓢箪(ひょうたん)山古墳の腕輪形石製品と玉類。左から鍬形石、車輪石、石釧(京都大学総合博物館所蔵、「京都大学文学部博物館」より)

製腕輪をモデルにして、古墳時代前期、4世紀の初めに生み出された儀礼用の宝器で、どの緑色の美しい石が

主に用いられました。考古学では腕輪形石製品とか碧玉製腕飾りなどと総称しています。



石川条里遺跡の石釧と車輪石(県埋蔵文化財センター発掘調査報告書より)

弥生時代の貝製腕輪は儀式や祭りをつかさどった人物が呪力や権威のシンボルとして装

着したことが推定されており、腕輪形石製品はその呪的な意味や権威を示す象徴としての性格を引き継ぐものと考えられます。初期には実際に腕にはめて使用されたこともあったようですが、間もなく穴が小さくなるとともに重くなって実用性を失い、腕輪の形をした宝器へと転換します。

腕輪形石製品は、原材料の産出地であり玉作りの伝統をもつ北陸や出雲で主に製作され、各地へもたらされますが、その生産と供給は畿内政権が握っていたとみる考え方が有力です。各地域の首長たちは畿内政権を介して腕輪形石製品を入手し、自らの威信を高める宝器としました。そして首長が古墳へ埋葬される際には葬送儀礼の重要な道具立てとなったのです。

腕輪形石製品を入手

若林 卓・県埋蔵文化財センター調査研究員